

## 患者が変われば 医療が変わる 医療が変われば 地域が変わる



島根益田がんケアサロン 代表  
C・T・V創生研究所 所長 納賀 良一

1937年5月、石川県金沢市生まれ。同志社大学文学部卒。特殊精密機器メーカーの(株)フジキン総務部部长兼改革推進室リーダーを経て、1994年3月、1ターンで益田市移住。益田ドライビングスクール合宿型システム作りを依頼される(ガイアの夜明けで放映)。その後、C・T・V創生研究所設立。地域で観光、定住、教育、医療など街おこしを実施。2005年12月、全国初のがんサロン開設。

第58回 痛みの先にあるもの

がんサロンを開設しながら終末期に関する講演をいろいろ開催してきたが、術後終末期で患者・家族が一番キツイところは痛みではなからうか。最初はがんに特化したテーマで元国立がん研

## がんの痛みテーマに講演会

ンター総長垣添忠生先生やがん専門医の平岩正樹先生をお呼びしていた。その後、小平クリニックス山崎章郎先生を初め、鹿児島の中野一司先生、夕張診療所勤務経験のある森田洋之先生など現役の在宅医を呼んだり、研究者の上野千鶴子先生を呼び「行く↓逝く、家で死ねますか?」で、生きること、死ぬことの難しさを問うたりした。

今回3月16日、2本立てで講演会を開催することに決めた。1本目は劇団「ザイタク」による「おひとりさまでも、自分の家でピンピンころりできるんで!」のDVDの放映。この劇は尼崎の在宅医、長尾和弘先生がプロデュースされたもの。出演者はほとんど大阪近郊の在宅医であり、忙しいのによく集まってこんな劇が出来たものだと感心する。医者役、患者役はもちろん、警察役、消防士役、葬儀社役、坊さん役までこれが医者かと思うほど上手にこなしていた。

2本目は島根県立中央病院今田敏宏先生による講演「穏やかな身取りのために 私たちが出来る意思決定支援」。今田先生はPCA(自己調整鎮痛法)を使われている。「痛み」は、患者本人はもともと家族にとってほんのり耐えがたい。我慢するだけでは済まない。「痛み」を自分でコントロールできるのは有難い。家族はもっと助かると思う。痛みの苦しい声を聞かなくていいからだ。患者の私からすると在宅医と病院医とは「痛み」に関する考え方の違いがある気がする。患者の痛みを少しでもなんとかしたいと努力する在宅医。一方少しは我慢しなさいと考える勤務医。エコひいきしているわけではない。本当にそう感じるからだ。入院中患者が痛がっても、先生がいらないとか、薬剤師がいらないとか看護師の返事は決まって冷たい。我慢するしかない時が多い。「痛み」のない時代がそこまで来ているのを実感している。